

アフリカの人々と名付け 33

「擬似子称」のある父系社会の論理

小馬 徹

女性にとっての父系と無系

農業と牧畜が成立した新石器時代以来、女性の交換としての結婚が人間社会の根源的な構造化原理となり、結婚が生殖を合法化して来た。そうである以上、女性は婚家とその親族集団に移籍されるだけでは不十分であり、やがて出産を契機に十全に編入されなければならない。

アフリカや中国、韓国の単系出自社会（その多くが父系社会）でも、また「家」という無系の（cognatic）集団によって構成され、往々養子も行われる日本社会でも同様に、女性の移動に関するこの事情に違いはない。かつてアフリカでは、通常少なくとも一児か二児の誕生後初めて結婚が正式のものとなったし、藩制期の日本でも「子無きは去る」のが規範とされた。

しかしながら女性の名前のあり方を指標とすれば、両タイプの社会での女性の婚家への移籍・編入の過程には、明確な差異が読み取れる。父系社会では、結婚後も妻は父親の氏族・リネージ成員であり続け、中国・韓国ではその姓は元のまま変わらない。アフリカでは今でも姓の観念が十分に定着しておらず、妻は相変わらず個人名で呼ばれ、登録も「〇〇の妻」という使用頻度の低い「夫称」でなされる事が多い。

一方日本では、妻の姓は即座に夫の姓に変わる。それが人格の豹変を意味した事は、花嫁の座敷口からの門出、門出に際しての飯茶碗割り、白無垢の装束などの象徴性から明らかである。それらは死者の門出（出棺）と同一の特徴であり、生家の一員としての死を象徴する。女性の改名が稀だった日本でも、再婚する女性は、その際に個人名も変える事が多かった。この行為は、いわば一種の儀礼として、二重の「死」を象徴すると言える。日本では、妻としての移籍

は名前の変化によって公示されたのである。

妻である事と、母である事

婚入後も妻の姓が変わらない父系社会でも、長子の出産を契機として妻が真に婚家に編入されると、その事実が一種の名前の変化によって公示される場合がある。アラブや東部アフリカの諸社会がその好例だ。そこでは、妻はこの機会に「〇〇の母」という子称（teknonym）を与えられ、以後広くこの名前で呼ばれる事になる。このような制度化された子称が夫の氏族・リネージへの妻の編入を保証するのは、その子がやがて成人して成員となる事実を負っている。

今述べているような社会における女性の心理を想像するには、幼稚園か保育園の状況を念頭に置くと幾らか助けになる。園児の母親たちは、何よりもまず「△△ちゃんのママ」、あるいは「××君のお母さん」として知られ始め、以後もこの名が重用される。幼稚園や保育園は、譬えて言えば「子称の世界」なのだ。万一、全ての若い女性は子供の有無に関わらず毎日園児の送り迎えに加わるべし、という社会慣行や法があったとしたらどうだろう。子の無い妻は子称を持たない事実によって社会からの疎隔を印付けられる。その孤絶感の深さはいかばかりだろう。上の諸社会では、いわばそれが女性たちの日々の現実となっているのである。

脱工業化以前の社会では、女性はどこでも母親である事において初めて社会的存在たり得るのだ。ある諺研究家の女性は、アフリカ全土の諺を見渡すと称賛される女性は母親だけだと言い、更に次のように述べる。「女性は恐怖と不信的だ。結婚してから長い年月が経った後でさえ、男は、女が家庭の中で余所者であり続け

ている事を心に留めておくべきだとされるのだ」[Shipper, M., *Source of All Evil*, 1992]。彼女の著書の標題『諸悪の根源』は、アフリカ男性の伝統的な女性観を表すものである。

妻が永久に休らうべき所

先にも述べたように、父系社会では、結婚後も妻は父親の氏族・リネージの成員であり続けるし、姓も変わらない。女性の観点に立てば、父系社会とは、婚入後も妻が夫の家族・親族の最中にただ一人他者として置き去りにされる類の社会なのである。氏族やリネージが固有の領土をもって集住する父系農耕社会では、妻の孤独はますます深く、しかも子供がなければその寄る辺ない思いはいよいよ果てを知るまい。

アフリカの父系社会では、妻の他者性は、死によってさえ改めて際立つ事になる。彼女の死体は、夫の屋敷地にではなく、彼女の父親（あるいは、その跡を継いだ彼女の兄弟）の屋敷地の一角に葬られなければならないのである。

この意味で、キプシギスを初め、ケニアの農牧民であるカレンジン諸民族の社会と文化は、それとの対照性のゆえに興味深い。彼らの社会は、数多くの小さな父系外婚氏族間の婚姻による政治的同盟のネットワークを構造的基盤としてはいるが、妻は結婚と共に即座に夫の氏族に編入される。しかも、夫との年齢差の如何に関わらず、妻は夫の年齢組の準成員としての待遇を受ける。だから同じケニアの父系社会でも、西ナイル語系のルオやバントゥ語系のキクユ、ルイアなど、殆どの民族とは違い、カレンジンの社会では妻の遺体は決して彼女の父親の屋敷地に送り返されはしない。彼女が永久に眠るのは、例外なく、夫が与えた屋敷地の一隅なのだ。

キプシギスの「擬似子称」

こうしたカレンジン社会の特徴は、子称をめぐる独特の慣行とも共鳴し合っている。私が長く参与調査を続けているキプシギスでは、妻の子称である“Obot**”（誰その母）という

名前は、出産後ではなく、婚入後間もなく与えられる。つまり、若妻が婚入すると、夫の家族の誰もが彼女の出産を待望する。実は、家族だけでなく、夫の氏族の祖霊たちもまた、自分たちがこの世に立ち返って宿り、その魂と化すべき新しい子孫の誕生を待ち詫びている。夫の家族には折々真先に「再来」を期待されている祖霊があるのだが、祖霊は往々妻の夢の中に現れて「再来」の意図を告げるので、その名前は通常若妻自身によって明かされる。その日以来若妻は、この祖霊Aに因んで“ObotA”（Aの母）と呼ばれるが、祖霊が若妻の夢に現れない時には、「再来」が最も強く期待されている祖霊に因む子称が与えられる事になる。

ただしこの種の子称は、次の事情から、出産までの仮称と言うべきだろう。妻の真の子称は、出産直後に執行される命名儀礼の結果によって決まるのだ。儀礼では、夫の氏族の老女たちが赤ん坊と同性の祖先の名前を次々に唱えて行く。赤ん坊の最初のくしゃみを祖霊の応答と見なし、その名前Bを赤ん坊の祖霊名に選び、また“ObotB”が妻の正式の子称となる。先の説明から予想される通り、しばしばAとBは一致するのだが、命名儀礼以前の子称は「擬似子称」と呼んで区別するのが相応しいだろう。

キプシギスの社会は、このように妻の編入法でも、また妻に「擬似子称」を与える点でも、通常の父系出自社会とは異なっている。それは、彼らの社会での女性の地位の「構造的な高さ」と相関していると言えよう。キプシギスでは、一人の男性の僚妻たち（co-wives）が互いに数10km隔てて自分の「妻の家」（*kop-chi*）を営む事を理想として来た。それは、敵襲か口蹄疫による家畜の被害の分散や、妻同士の嫉妬の最小化の機能から往々説明される。いずれにせよ、女性は逸早く夫の家族に編入されてその中に深く包み込まれる反面、独自の「妻の家」を営む半ば自立した存在への成長もまた、社会から期待されているのだ。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）